

第一章 山田方面

○ 二つの数河峠（すこうとうげ）

「数河峠」の名称には二つのルートがある。

一つは、神岡町西地区から国道四十一号線の古川町数河地区を通り戸市に至る峠である。「古川・数河峠」とする。

二つめは、神岡町大笠地区から古川町数河地区へ抜ける峠である。「大笠・数河峠」とする。

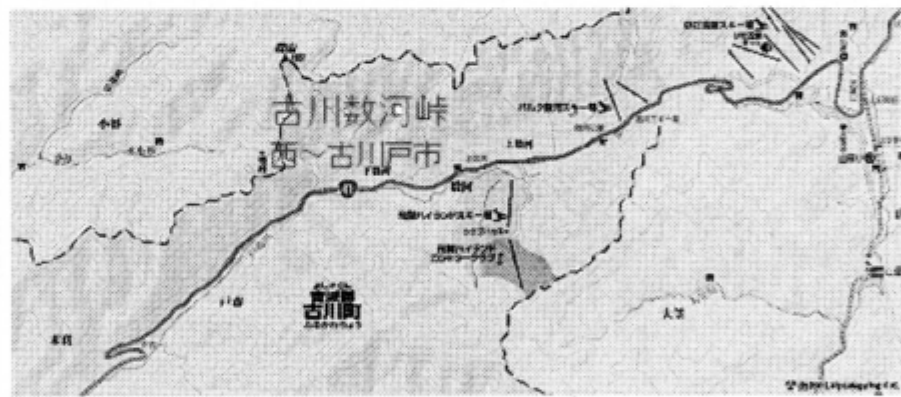
普通、人々が指す「数河峠」と言うのは、西地区から数河地区を通る峠「古川・数河峠」のことである。

一、数河峠（すこうとうげ）

神岡町西　　古川町数河

神岡町西地区と古川町数河の境、その景観美について「古川より標高八九六米の数河峠を超えて神岡入りをすると、眼前に白銀光る北ア連峰が迫ってくる。紺碧の空に雄姿そのままの笠、その左側に穂高の峻岳が位置する」と、山田・寺林公民館便り『峠今昔物語』は記している。

古川町数河との境界は、西地区字桜洞であり、数河峠頂上付近の尾根に当る。数河の地名の由来は、かつてス



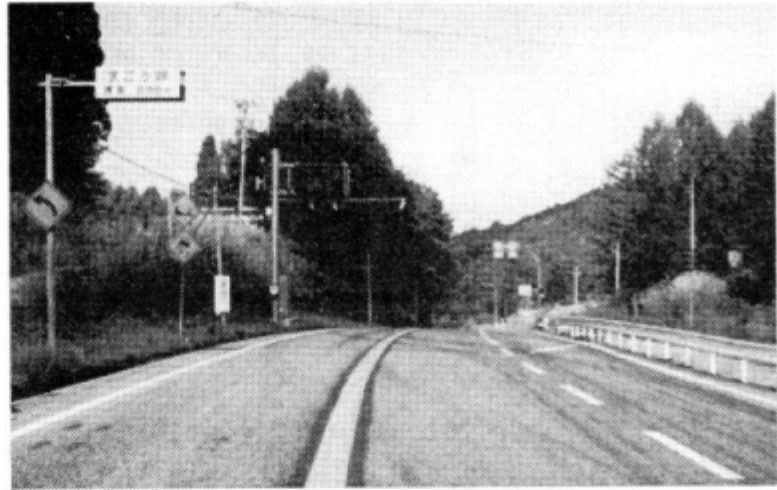
八米）幅のガタガタ道であった」と西田生男氏の『飛騨の峠』にある。

「陸の孤島」「隣村との」交流はほとんどなく「大変な坂道」「曲がりくねった六尺幅のガタガタ道」などから推して、当時は隣接する旧袖川村との交流も少なかったようである。唯、炭焼きが盛んであったところから、冬

ゲの生い茂った地であったため菅生(すげお)と称し、後に数河に転じた」と『斐太後風土記』にある。

「数河は、江戸時代から明治、大正時代になっても陸の孤島であり、隣村との交流はほとんどなく、病人がでた時などは大変であった。お産の時も産婆さんに頼むことなく、自分の家で取り上げたという。町への売り物や買い物に行くには、道路が悪いために、車を使うことができず、大きなものは馬につけて運び、たいはいは人の背にかついで運んだ。大変な坂道である上に、曲がりくねった六尺(一、

現在の数河峠



はソリで船津の町へ炭売りに行く道であったという。

『峠今昔物語』のなかに「里道にして本村西区阪口を起点とし細江村に入り、数河・戸市を経て野口に至り県道西街道に合す。道幅平均一間余車を通ぜず。時折人馬が通る程で、山田学校の遠足道であった」とある。

現在の数河峠は、昭和四十年（一九六五）に国道四十一号線として共用される。飛驒における南北の幹線道路としての役割を果たすとともに、地域生活に欠かすことのできない生活道路である。陸の孤島としての数河峠一帯は、スキー場、ゴルフ場、サッカー場、テニスコートなどスポーツ施設、休憩場のドライブイン、旅館など、観光地としても大きな変貌を遂げる。なお、「奥飛驒数河川流域県立自然公園」に指定され、飛驒の軽井沢と呼ばれている。

二、数河峠（すごうとうげ）

神岡町大笠 ～ 古川町数河

大笠・数河峠は、神岡町大笠と古川町数河の境界に位置する。峠は、大笠川の左岸、大字大笠区の中程にある字大垣内を入口に、支



流である岩垣内川の谷沿いの上って行く比較的傾斜の緩やかな尾根伝いの山道である。なお、峠への道は、現在は谷沿いの歩行しやすい南東へと移動している。道幅は牛・馬の通るほどの広さであり、徒歩が主なものであった。峠の道程は約二軒。昭和三十四年～三十五年頃、数河ハイランド入口のバス停に「大笠口」とあった。しかし、乗降者はほとんど無かったようである。山田学校の遠足のコースであったそうである。現在峠付近は「ふるさと林道」が開設中である。

大笠区の地形は、海拔八百米～千百米程度の山々の尾根に囲まれた細長い谷沿いの集落である。大笠川は大谷